

2022年3月1日「取締役会や経営者が見るトップリスクのグローバル調査~2022年と2031年のリスクの展望と対応~」ご質問とプロティビティの回答

No	頂いたご質問	Protiviti回答
1	ESGにおいて、内部監査は、どのように取り組んでいけば良いでしょうか。	ESG関連のリスク管理や、報告プロセス、関連する規制の遵守の有効性について客観的な保証を提供したり、ESGの統制環境(方針、プロセス、組織)の構築に向けた助言を提供したりすることが考えられます。 各監査対象領域(オーディット・ユニバース)のESG関連リスクを評価し、また、監査対象領域に組織横断的なESG関連項目を加えることも検討します。 ESG報告に関しては、日本内部監査協会の月刊監査研究2021年8月号掲載の「ESG報告における内部監査の役割一効果的なサステナビリティ報告には、独立したアシュアランスが不可欠である」を参照されることをお勧めします。
2	AI技術の浸透による労働機会の減少が話題となりますが、本リスクによる影響はどの項目と理解すれば良いでしょうか。	Al技術をはじめとした新しい技術革新が既存の職務を脅かし代替するというリスクは、もう一方で新たな技術を前提にした新たな職務を生み出すということがいえます。職務に求められるスキルが変化することから、「デジタル技術の導入に必要なスキル確保や社員再教育への投資」というリスクが2022年では第4位、2031年では第1位のリスクに上げられています。労働環境におけるAlをはじめとする新たな技術の導入は競争優位を確保するためには必須であり、そのためには従業員の保有するスキルをそれに合わせて適合させるという、時間軸の長いリスク対応になると思われます。
3	ESGはSDG s(国連)の上位概念として考えて良いでしょうか。	「SDGs Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」は、2030年までに人類が理想とする"誰一人取り残さない、持続可能で多様性と包摂性のある社会"を実現するための国連で採択された目標です。この目標達成に貢献するのは特定の企業だけでなく、政府や地方自治体、NGO/NPO、個人などもふくまれます。 「ESG」は企業の経営や成長において「環境」「社会」「企業統治」の3つの要素に配慮した考え方です。「環境」とは二酸化炭素(CO2)排出の削減や環境保護、「社会」とは働く環境の改善やダイバーシティーの推進、「企業統治」とは公正・透明な経営や積極的な情報開示などが議論されています。さらにこれらの解決に取り組み、ガバナンス(企業統治)がしっかりした経営をしている企業に投資する「ESG投資」は、2006年に国連が発表した「責任投資原則(PRI)での提唱をきっかけに年々拡大しています。投資家がESG投資を通して企業を変え、それによって社会をも変えようという発想です。どちらが上位概念というよりは、「SDGs」も「ESG」も、ともに環境問題や社会課題を解決し、持続可能な理想社会を実現するための概念です。「SDGs」が国や一般の人々も含めたあらゆるステークホルダーを対象にしているのに対し、「ESG」は主に経済界や企業を対象にしており、また、「SDGs」が「目標・ゴール」であり、「ESG」は企業がそれを達成するうえでの「手段・プロセス」と言えます。
4	リスク評価として、定量分析が求められますが、どのような手法が多く採用されていますでしょうか。	リスク評価は、定性的、定量的またはその両方の組み合わせで通常行われます。 定量化のデータが十分にない場合やコストが見合わない際には、インタビュー、ワークショップ、サーベイ、ベンチマークなどの定性的評価アプローチが一般的 に使用されています。 定量性的評価アプローチには、モデリング、ディシジョンツリー、モンテカルロシミュレーションなどは、より複雑で成熟度の高い活動において活用されます。 確率モデル(パリューアットリスクなど)は、金融業界の市場、信用リスクの評価でよく活用されています。 非確率モデル(感応度分析、ストレステスト、シナリオ分析)などは、AML、不正リスクの評価でよく活用されます。 こちらもご参考ください: 『ホワイトベーバー:モデル・リスク管理に関する原則の公表~AML/CFT(マネー・ローンダリング/テロ資金供与対策)に与える影響について~』 https://www.protiviti.com/JP-jp/insights/model-risk-management-principle-announcement

@ 2022 Protiviti Inc.